

平成30年11月13日(火)

「古今和歌集仮名序」

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言(こと)の葉はとぞなれりける。
和歌は、人の心をもととして、(それが)さまざまな言葉となったものである。

世の中にある人、ことわざ繁(しげ)きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出いだせるなり。

この世に生きている人は、(かかわる)出来事や(する)行為がたくさんあるので、(それらについて)心に思うことを、見るものや聞くものに託して言葉に表しているのである。

花に鳴く鶯うぐひす、水にすむ蛙(かはづ)の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

(梅の)花(の枝)で鳴く鶯や、水にすむ蛙の声を聞くと、(この世に)生きているすべてのものは、どれが歌を詠まないということがあろうか。(いや、すべてのものが歌を詠むのである。)

力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれと思はせ、男女(をとこをんな)の仲をも和らげ、猛(たけ)き武士(もののふ)の心をも慰むるは、歌なり。

力をも入れないのに天と地(の神々)を動かし、目に見えない恐ろしい神霊をも感動させ、男女の仲をも親しくさせ、勇猛な武士の心をも和ませるものは、歌なのである。

物語の初めは、『竹取物語』である。竹取物語は、伝奇物語である。この伝奇物語の系譜とは別に、日本文学史の中で、物語には、歌物語の系譜があり、やがて、伝奇物語と歌物語が融合して、かの「源氏物語」に集大成していくのである。

なぜ、日本文学には歌物語があるのかを考えると、この古今集仮名序に行きつくと考えられる。

「和歌は、人の心をもととして、(それが)さまざまな言葉となったものである。」古来、日本人の感情の発露は、歌だったのである。

生徒には、そんなことを踏まえて、古典を教えたい。2年生の冬課外のテキストは、和歌に関するものだそうです。